

# リタイア期を迎えた団塊男性は テレビに何を求めるか

メディア研究部 齋藤建作

団塊男性がリタイア期を迎えており、自由時間増加の中でテレビ視聴量の増大と視聴傾向の変化が生じている。本稿ではそうした変化のうち団塊層に特徴的であると思われる点を中心に、グループインタビュー調査の発言を整理して報告する。団塊層は少年期にテレビに出会った第一世代、いわゆる「テレビ世代」の先駆けとして、若い頃にテレビに熱中した記憶があり、ある意味で現在のテレビに物足りなさを感じている。一方、ハイビジョンの普及、録画性能の向上など視聴環境は一段と改善しておりテレビに寄せる期待は大きい。見たいと思う番組を探し出したり、気に入った番組を徹底して見尽くしたりなど、これまでの高齢層よりテレビに対する積極性が強い。彼らが見たい番組は、ドキュメント、感動もの、考えさせる教養ものなど、見て意味のあるものだという。その背景にはリタイア期の戸惑いがあるようだ。もっともそのようなものばかり見ているわけではなく、バカ笑いするほど楽しいもの、心和む紀行ものなどが好まれている。また、リタイア直後で社会的関心も強い。ニュースや情報番組にはリアルタイム情報と分かりやすい解説を求めている。一方、家庭での家族との関係も深くなる。その際、テレビは家族との「かすがい」として役割を期待され、家族が共通に楽しめて会話が弾む番組として娯楽番組を求める傾向がある。

## 1 リタイア期を迎えた団塊層

### ○ 2007年問題

いわゆる「団塊の世代」に関する資料を探していると2007年前後に出されたものが目に付く。これらの多くは「2007年問題」と言われる事象を意識したものであった。すなわち、2007年は団塊層（1947～49年生まれ）が60歳を迎えて大量定年時代に突入する年に当たっていた<sup>1)</sup>。

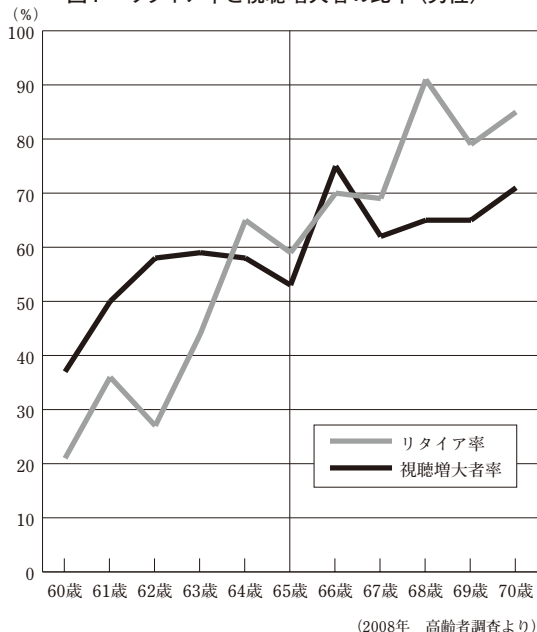
だが、視聴者がどのようにテレビを見ているのかという観点からすると60歳の定年は必ずしも大きな節目ではない。身分的、制度的に定年となった後も多くの人々は何らかの形で働き

続けており、テレビ視聴という観点からは、生活時間的にも視聴意識の上でも50代を引きずる面が大きいと考えられるからである。

そこで我々は2006～08年当時、団塊層に先行する60～70代の視聴者に関する調査を積み重ね、高齢者のテレビ視聴に関するいくつかの報告を行った<sup>2)</sup>。その調査の中からリタイアとテレビ視聴の増大についてのデータ<sup>3)</sup>を比べてみると(図1)、60代の前半でリタイアが増加しているのにあわせて視聴増大者も増えていることが分かる。

こうしたことから、団塊層にテレビ視聴の観点で大きな変化が生じるのは彼らが65歳を迎える2012年以降であろうと予測した。

図1 リタイア率と視聴増大者の比率（男性）



## ○高齢層と団塊層

すなわち昨年くらいから団塊層は本格的なりタイア期を迎えており、それに伴って視聴時間が増大するなど視聴状況に変化が生じていると考えられる。

そうした変化の中には、団塊層に先行する高齢層で見られたものとそれほど変わらない側面は少なくないだろう。例えば現在の団塊層の男性とこれまでの高齢層の男性に、テレビで見たいものを聞いてみると、上位にくるものの顔ぶれはあまり変わらない(表1)。このように、現在進んでいる団塊層の視聴変化について、これまでに得られてきた知見で十分に推測できる部分はある。

表1 テレビで見たいもの 団塊男性と旧来的高齢男性の比較

団塊男性 (2012年調査 視聴増大層)		高齢男性 (2008年調査)	
順位		順位	
1	くつろいで安心できるもの	1	世の中の出来事や動きを伝えてくれるもの
2	感動を与えてくれるもの	2	楽しい気分になれるもの
3	心がなごむ・癒されるもの	3	感動を与えてくれるもの
4	楽しい気分になれるもの	4	くつろいで安心できるもの
5	世の中の出来事や動きを伝えてくれるもの	5	知識や教養が身につくもの
5	知識や教養が身につくもの	6	自分の趣味に役立つもの
5	生活に役立つ実用的な知識が得られるもの	7	心がなごむ・癒されるもの
8	自分の趣味に役立つもの	8	生活に役立つ実用的な知識が得られるもの
9	昔を懐かしむことができるもの	9	考えさせられるもの
10	考えさせられるもの	10	言いたいことを代弁してくれるもの
11	番組に夢中になって、我を忘れさせてくれるもの	11	昔を懐かしむことができるもの
12	ゆったりとしていて忙しくないもの	12	ゆったりとしていて忙しくないもの
13	分かりやすいもの	13	人と話をするときの話のネタを得られるもの
14	バカ笑いのできるもの	14	分かりやすいもの
15	言いたいことを代弁してくれるもの	15	番組に夢中になって、我を忘れさせてくれるもの
16	人と話をするときの話のネタを得られるもの	16	参加している気分になれるもの
17	にぎやかなもの	17	バカ笑いのできるもの
18	参加している気分になれるもの	18	にぎやかなもの

N=181

N=324

\*左表は後述「調査②テレビ視聴が増大した60代前半男性に対するweb調査」の集計結果。右表は「高齢者のテレビ視聴(上・下)」『放送研究と調査』2008年9、10月号で報告した高齢者調査の集計結果。後者の調査対象者は当時60～79歳の男女であったが、そのうち男性について再集計したものを。

\*網掛けは団塊男性の上位5位までの7項目と、高齢男性の上位7項目とで共通するもの。

\*団塊男性については、選択肢からマルチアンサーで選んでもらったもの。高齢男性については、「非常にあてはまる」から「全くあてはまらない」までを7段階で選んでもらったものの中から、「あてはまる」計にあたる3段階を集計したものを。また、団塊男性は最近テレビ視聴が増大した対象者であり、右表の高齢男性は特にそのような条件はない。従って、これらを直接比較するのは適切ではなく、参考データとして掲載した。

しかしその一方で、これまでの高齢層とは異なり、団塊層に特有だと考えられるいくつかの側面がある。

中でも最も重要と思われるのは、団塊層の大半が子供時代にテレビと出会い、テレビに熱中した経験を持っているという点である。彼らはテレビを娯楽として楽しむことに当たり前に慣れ親しんで青少年期を育った最初の世代である。そして、以前に報告したとおり、テレビに出会った年齢が低いほどその後テレビに熱中した比率が高い<sup>4)</sup>。

そのような生き立ちは、いわゆる「テレビ世代」の先駆けであり、団塊層の高齢入りを注視することは、その後数十年にわたる年層を考える上でも重要な意味を持つだろう。

また、団塊層の高齢化を待ち構えていたかのように、地デジ・ハイビジョン・大画面・HDDなどの普及が行き渡り、テレビの視聴環境は大幅に改善している。その意味でも団塊層にとってテレビ視聴の価値や期待は高まっている。

なお、以上の記述は特に断りもなしに、団塊の「男性」に焦点を当ててきた。言うまでもなく、現在一斉にリタイアが進行しているのは大半が男性である。テレビ視聴に大きな変化が生じるという意味での団塊問題は主に「男性問題」と言える。その点、高齢化全体については男性よりも女性の方がずっと比率が高いため、高齢問題は「女性問題」だとしばしば言われるのと対照的である。

## ○ 調査概要

以上のような関心から、団塊層の主に男性に絞り、テレビ視聴の状況や意識の具体的な様相を探るために次のような調査を実施した。

### 調査① 団塊層グループインタビュー

1. 時期：2012年3月6日(火)～8日(木)
2. 調査方法：グループインタビュー
3. 調査対象：1日に3時間以上テレビ視聴している62～65歳の男女24人
4. 調査内容：団塊層の意識、テレビ視聴全般

### 調査② テレビ視聴が増大した60代前半男性に対するweb調査

1. 時期：2012年8月22日(水)～24日(金)
2. 調査方法：インターネット調査  
視聴番組についての日記式調査  
テレビ視聴に関するアンケート調査
3. 調査対象：最近1～2年にリタイアしテレビ視聴が増えた60～65歳の男性181人
4. 調査内容：視聴状況・視聴番組の変化

### 調査③ テレビ視聴が増大した60代前半男性に対するグループインタビュー

1. 時期：2012年9月27日(木)～28日(金)
2. 調査方法：グループインタビュー
3. 調査対象：最近1～2年にテレビ視聴が大幅に増えた60～65歳の男性24人
4. 調査内容：視聴増大の中でテレビに求めるようになっているもの

この調査③は、調査②から抽出した番組(主に対象層がよく見るようになったもの)の一部を対象者に見せて話を聞いた。

なお、調査②③においてはいわゆる団塊層(調査時点で62～65歳)だけでは必要数の対象者を集めることができなかつたため、年齢幅を60歳まで下げた。実年齢よりも、「最近リタイアしたりテレビ視聴が増大した」という条件を重視した次第である。

従って以下に述べるのは、団塊層を中心と

する60代男性がリタイアを迎えテレビ視聴が増大したことで生じている、テレビを巡る意識や行動の現状・変化に関する報告である。

いずれの調査も、対象者は関東地区在住のビデオリサーチ社調査モニターから抽出した。

## 2 団塊層のテレビ人生

### ○ テレビっ子の自覚

団塊男性の多くが「自分は団塊の世代だ」という意識を持っている。「人数の多い競争社会を生きてきた」「打たれ強くバイタリティがある」などのイメージを共有している。だがリタイアしてみると、昼間のジムやプールなどはもっと高齢な人々で既にいっぱい。「あの人たちの元気について行けない」と感じたり、「自分たちは隠れていた病気の実験台だった」などとやや弱気なことを言ったりする。

そうした言葉に続けて、自分たちは「テレビっ子」だという自覚も出てくる。この言葉もどこか自嘲気味である。

「(リタイア後の生活は)ウォーキングしたり、畑をいじったり野菜を作ったり、あとはテレビを見る。団塊の世代なのでテレビっ子ですから。だって(子供の頃)何もありませんよね。だからテレビっ子」(男65歳)

一方、テレビとの出会いの話題になるとにぎやかになる。

「町内でテレビが1軒入って、金持ちの家に入って、商売をやっている人の家に入って」(男65歳)

「喫茶店で見た、プロレス中継。その時はコーヒーだけじゃダメで、ケーキをセットにしないと入れてくれなかった」(男64歳)

「白井義男のボクシングの試合で、天井が抜けてしまったことがある」(男62歳)

### ○ テレビ人生

1959年の「皇太子ご成婚」に向けて多くの家庭にテレビが入った。1947年生まれの最初の団塊層でも小学生のうちにはたいていテレビに出会っている。小学校入学前に放送が始まっているから、実際に見られる日を心待ちにしていたに違いない。

表2は1947年生まれの団塊層が今日までたどってきた歳月を、テレビとの関連が深い出来事を中心に年表にしたものである。これを見ると、テレビを通して時代を目撃してきた人生であるという印象が強い。

表2 団塊男性とテレビの年表(1947年まれの場合)

年	主な出来事	年齢
1947	誕生	0
1953	テレビ放送開始	6
1956	『チロリン村とくるみの木』放送開始	9
1958	東京タワー完成	11
1959	皇太子ご成婚	12
1960	カラーテレビの放送開始 この頃アメリカ製ドラマ放送多数	13
1961	朝ドラ放送開始	14
1963	大河ドラマ、『鉄腕アトム』放送開始	16
1964	東京オリンピック 『ひよっこりひょうたん島』放送開始	17
1966	ビートルズ来日	19
1968	三億円事件発生	21
1969	アポロ11号月面着陸	22
1970	大阪万博	23
1972	札幌オリンピック、浅間山荘事件	25
1985	日航機墜落事故	38
1989	ベルリンの壁崩壊	42
1995	阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件	48
2001	アメリカ同時多発テロ事件	54
2003	地デジ放送開始 以後、2011年のアナログ停波に向けて、ハイビジョン・大画面テレビの普及拡大	56
2011	東日本大震災	64
2012	ロンドン・オリンピック	65



そしてリタイア期に臨んで、東日本大震災の津波映像に衝撃を受け、ロンドン・オリンピックでは、日本選手の活躍を堪能した。テレビ画面を通して。

### 3 テレビへの思い入れ

#### ○ 若い頃の感動

幼い頃テレビに感動した記憶が生々しい。

「子供の頃にテレビが出てきた。誰かんに大勢が集まった。力道山。憧れ、感動、初めて接した時の感動がいまだにある」(男64歳)

そのような若年期の記憶との対比で今のテレビを見てしまうという側面がある。上の言葉に続けて言う。

「(今のテレビは)くだらないものやっていると。昔はチャンネルを手でまわしていたから1回まわすと(見るものが)決まっていた。今はカチャカチャ。テレビは空気みたい」(男64歳)

若年期の熱中が高齢期の視聴増大を抑制する傾向があるというデータを報告したことがある<sup>5)</sup>。若い頃の感動が強く大きい分だけ現在のテレビを物足りなく感じてしまう、と言えるだろうか。ただしそのデータは、若い頃のテレビに熱中した「記憶」と、最近テレビを見ることが増えたと感じる「自覚」とを聞いたもので、意識と意識との間の関係である。実際の感動がどれほどだったか、実態として視聴が増えているか、を測っているのではない。むしろ、意識の上のことだからこそ現れた関係だとも言える。

上の男性にとっては、若い頃ほど感動できないと言う今のテレビだが、彼は続けて次のようにも言う。

「『はじめてのおつかい』(日本テレビ・不定期)は涙がぼろぼろ出る」(男64歳)

「昔は感動した」「今はつまらない」など、よく聞かれる言葉は正直な気持ちを語っているに違いないが、その意味内容がどれほどなのか、真の値を押し量ることはなかなか難しい。

#### ○ 歌番組がない、ヒーローがない

地上波のテレビでは若い世代に向けた番組が多く、自分たち向けの番組が少ないという発言がしばしば聞かれる。

その一方で、自分たち向けの数少ない番組を探し出して見ている人もいる。例えば団塊層の心に響く音楽は、今の若い歌手たちの歌ではなく、昔馴染んだ歌だ。

— 僕がよく見るようになったのは、BS4の月曜9時からの『日本の歌』(『BS日本・こころの歌』BS日テレ・月曜21時)。あれはいい。毎回見ている(男64歳)。

— あれかあ、知ってる(男61歳)。

— 声楽で歌うヤツですよ？ ああいうのを見ている。今までは会社でカラオケに行ったりして自分で歌っていたが、それがなくなっちゃったから、家で見てる(男65歳)。

— やっぱり学生時代に流行った歌とか歌ってるから、その時の気分になる(男64歳)。

また、若い頃夢中になったヒーローたちも心に残っている。

「今不足しているのはヒーローが出るやつ。月光仮面とか。そういうのがないから若いやつが変な方向に行っちゃってる。憧れもないし、正義感がない」(男60歳)

「昔は赤胴鈴之助に憧れてみんな剣道、柔道一直線で柔道をやった」(男62歳)

## ○ ローハイドはつまらない

調査①の中で、団塊層の男性が『ローハイド』(1959年から放送)のビデオを借りて見たが面白くなかったという発言があった。調査③でも、特に質問をしたわけではないが同様の発言が立て続けに出た。

——子供の頃に見ていた海外ドラマをビデオ店で借りて見たけど、がっかりした。3兄弟のウェスタンのやつ(男62歳A)。

——『ガードマン』(1965年から放送)を借りてきて見たけど、面白くなかった。子供の頃はよかった。子供の頃は新鮮な世界だったけど、今見たら変な感じ(男63歳)。

——昔見たのを今見ても全然面白くない。『コンバット』(1962年から放送)も今見たけど、ものすごくちゃちくて(男62歳B)。

自分たち向けの歌番組を探したり、子供の頃に熱中した番組ビデオを借りて見たりといった行動は、これまでの高齢層からはあまり聞かれなかった。団塊層は上の年層に比べて、昔のテレビが面白かったという記憶が強い分だけ、テレビで楽しみたいという欲求も積極的になっているようだ。半面、その同じ記憶が現在のテレビに対する不満にもつながっている。すなわち要求水準が高い、と言い換えることができるかもしれない。

ただそのような自分たちの要求や不満が、いわば“ないものねだり”に近いものだとも感じている。

「もともとテレビで満足が得られないのは分かっている。子供の頃テレビが出てきて、月光仮面やプロレスしかないから、それしかないから満足が得られる。でもそうじゃない時代に入ってし

まった。テレビは、いい時間の消化」(男62歳)

## ○ 団塊層は揺れ幅が大きい

テレビの不満を聞けば「自分たち向けがない」「同じような番組ばかり、同じようなお笑いタレントばかり」と言い、満足を聞けば「昔の方がよかった」「どうせ時間潰し」といった言葉が出てくるという構図は、基本的にこれまでの高齢層とそれほど違いはない。ただ、テレビが楽しかった記憶が強い分だけ、行動は積極的になっており、不満や満足の気持ちの揺れ幅が大きくなっている、とまとめられるだろう。

それで結局テレビから離れてしまうというわけではなく、「時間の消化」などとわきまえた様子を見せながら、テレビに没頭していて奥さんの話を聞いていないことを怒られたりしている。

「ご飯食べている時にテレビを見てると、女房は怒る。ずっとテレビの方を見てると、私の顔を見ろというわけ」(男62歳)

## 4 視聴量が増大

### ○ 視聴環境は良好

テレビの内容面を聞けばいろいろな不満が出てくるが、視聴環境については誰もが満足している。ほとんどの家庭で画面はハイビジョンで大型化している。だから「スポーツはスピード感が出る」「臨場感があって山の景色がきれいだ」という実感を持っている。

「絵がきれいになった。それに伴って映画でもそうだが迫力が違う。当然見る。きれいだから。映画だけじゃなくて、ドキュメンタリーでもドラマでもそう」(男63歳)

その大画面との出会いがまだ新鮮なうちに、東日本大震災の衝撃映像を目撃した。「東日本

大震災があって、リアルな場面は見られない」と言う仙台出身の男性がいた。だが「大震災以来テレビを見るきっかけが増えた」という発言もあるように、震災も、ちょうどリタイア期を迎えた団塊層にテレビへ目を向けさせる一因となったようだ。

## ○ 存分に見る

そして、どのようにテレビを見ているのか視聴の実態を聞くと、「連ドラは毎週見たくなるけど、仕事で見られないとくやしい。仕事をやめて見られるようになって、うれしい、楽しい」とか「昼間見られるようになったのがすごくうれしい。再放送といっても、私にとっては再放送じゃない」などと、存分に見られるようになったことを手放しに喜ぶ声を山のように聞いた。もっとも自由時間とテレビ視聴が増えた人たちに集まってもらったのだから、このこと自体は当然とも言える。

そこで以下では、彼らの視聴量が増大する中で見られるいくつかの傾向を、これまでの高齢層との違いを意識しながら整理してみたい。

### (1) 今まで見なかったものを見る

以前に高齢者のグループインタビューで、年を取ったらたくさんテレビを見たいと思っていたかどうか聞いたところ、そう思っていたという人は少数派で、たいていの人は特にどちらとも考えていなかったとの答えだった。「リタイアしたら思う存分見てやろう」と構えている人は少ない。この点はこれまでの高齢層と大差ない。

「最初は(テレビは)いらなと言ったけど、いらなものではないかも」(男63歳)

自由時間が増えてから、ふと気づくと自分が思いのほかテレビを見ている、と感じる人も少

くない。そういう人にとっては、自分がたっぷりテレビを見ているという体験そのものが新鮮でもある。

「仕事をやっていた時は当然昼間見られないわけで。昼間見られるようになって、こんなにいろいろな番組が(あって)、初めて見てる」(男63歳)

「知らないことを知られる、そういうことでチャンネルを探す。面白いものを探すのが楽しみ」(男65歳)

「見たい番組が見られるようになって選択肢が広がった」(男64歳)

### (2) かつて見られなかったものを見る

前述のように、連ドラを欠かさず見られるようになった、という類の話は多かった。

「『北の国から』はこういうものだったのかと初めて分かった、再放送で。現役の時は見ることができなかった」(男64歳)

「連ドラは、現役の時、妻から面白いという話を聞いていた」(男65歳)

「女房子供は月9とか見ているけど、見られなかった。たまに見るけど、続けて見ないと面白くない」(男62歳A)

「ワールドカップをニュースでやってもあつという間に終わるし、今サッカーまるまる90分生で見られるなんて、なんて幸せなんだろう」(男62歳B)

これらの発言は、これまでの高齢層に比べて、テレビへの積極性が色濃く表れていると感じられる。

### (3) 徹底して見る

そして、ドラマやスポーツを見る時、その見方が徹底している。

「週に1回のドラマは、忘れちゃ困るので録画す

るけど、必ずその時見るようになった。要するに待っている、来週はどうなるのか。以前はそんなことはどうでもよかったけど」(男62歳)

「見たい番組を選ばなきゃならないので、片っ端から録画する」(男60歳)

「深夜のサッカーやオリンピックもリアルタイムで見られる。遅くまで見ていても仕事がないので夜更かししても全然平気」(男60歳)

「オリンピックなんて今まであんなに見られなかったが、今回は、活躍したこともあるが、見ていた」(男63歳)

団塊層の男性にとっては、昨年のロンドン・オリンピックが初めて堪能したオリンピックだという人が多かったようだ。

#### (4) 録画して没頭する

前節の例にもあったが、録画をよく使うという人は多い。HDDやDVDの普及で録画が手軽になり画質もよくなった。それがちょうど団塊層のリタイア時期に重なった。

録画しても見切れないという声もちろんあるが、「録画していた映画を夜中2時からいまで見る」(男62歳)、または「女房がいる時は女房に(テレビを)取られちゃう。自分は録画して、いない時に見る。妻は昼間働いているので」(男60歳)などと、大体“夜中派”か“昼間派”かに分かれるが、誰にも邪魔されない頃合を選んでひとりで没頭して見ている。

#### (5) つけたら消さない

録画については、見たい時に自由に見られるようになったのだからかえって減った、という発言もなくはなかった。だが、見たい番組が見当たらない時もある。例えばそれが夜中や昼間。そういう時間帯に録画が活躍している模様だ。

一度テレビをつけるとずっと見ている、という声は多い。

「最近感じるのはBGMみたいな感じ。つけなくて静か。あまり静か過ぎてもいやなので、テレビをかけながら、という感じ」(男64歳)

「朝起きてから寝るまでつけっぱなし。高校時代、夜のラジオを聞きながら勉強していたクセが抜けない。勤めているあいだはそれはなかったが、うちに入っちゃうと、静かだとなんか落ち着かない」(男63歳)

もっとも、家の中が静かで寂しいからテレビをつけておく、という声はもっと上の高齢者からも数多く聞かれる。若い頃の深夜ラジオが果たして主な原因であるかどうかは不明である。

#### (6) リアルタイムで見る

好きな時に見られるのであれば、リアルタイムで見るのにふさわしいものを録画する必要はない。

「働いていた時は、『ワールドビジネスサテライト』(テレビ東京・月一金曜23時)は録画して翌朝早送りで見っていた。それが今はなくなった。今はニュースはリアルタイムで見る」(男63歳)

「働いていた時はニュースなんかもリアルタイムで知らないことが多い。今はテレビはつけっぱなしで、情報がリアルタイムで入ってくるから全く違う」(男61歳)

サッカーやオリンピックなどのスポーツが見たければ、深夜でもリアルタイムで全部見る。前述のとおりである。

## 5 まじめ、バカ笑い、癒し

「まじめなのと、バカ笑いするのと、癒されるのと」(男64歳)



団塊男性が見たいものを、ひとりの男性がこのようにコンパクトにまとめてくれた。

どのような番組を見たいのか、あるいはどのような番組をよく見るのか、を聞くと、まずは「まじめなの」が挙がってくる。

「ドキュメンタリーが好き。リアルなので感動するし、なるほどすごいなど。作られたものじゃないので、本当の話なので感動する」(男65歳)

「最近NHKを見直してきた。昔は見なかった。番組の内容がNHKの方がいい。科学的な問題。遺伝子治療とか、深く専門的なことをやる。地震の映像を流しているが、説得力がある」(男63歳)

上記のような発言は団塊層より上下で言えば上の世代の気質に近いだろう。

「8月になると、いわゆる戦争で体験した人の話とか、自分たちの親とか、もうなくなった世代の人なんかの番組は好きなんです」(男63歳)

子供時代にテレビと出会い、熱中し、ずっと見続けてきたというテレビとの距離感などでは、彼ら以後の世代に共通点が多いが、本人たちはどちらの気質に近いと思っているか。

「上の方に近い。どちらに共鳴するかという意味でしょ。同じ境遇の中で生活してきた。下はだいぶ違ってくる、ものの発想が」(男63歳)

この発言が同年代の代表とは言えないが、団塊層の心にはこれまでの高齢層に近いマインドが少なからず残っていると思われる。

すなわちテレビ番組は「本気で頑張っている」「信ぴょう性がある」「役に立つ、ためになる」など、見て意味があることを好む、と言う。

リタイア期だから人生に向き合う年代だ、という意見もあった。

「我々の年代はほとんど終わりに近いでしょ。今までやってきたことに対して、こんなこともできたんじゃないかといういろいろ考えちゃうんだ

と思う。本当に好きな仕事をやってきたのだろうか、という寂しさがある。『仕事ハッケン伝』(NHK・木曜20時)を見てると、今からでも遅くないかなとか。だってやつができるんだから、できるんじゃないかとか」(男62歳)

だが現実には日々長時間テレビを見ており、ずっと真剣に見ているわけではない。実際に見ている番組名を挙げてもらうと、笑点、サザエさん、世界の車窓から、なんでも鑑定団、水戸黄門、ためしてガッテン等々、よく馴染んできた番組ばかり、そしてそれほど「まじめなもの」が多いわけではない。

グループインタビューで話が進むうちに、案外「まじめなもの」以外を自分も見ていることに気づく。

「民放はお笑い番組みたいなのばかり。それもけっこう見ると面白い。ドラマは見えてないと言ったがよく考えたら見ているものもあった。バラエティもよく考えたら見てる。敢えてつけて見ようというものもある」(男63歳)

見たいものは何かと聞かれると、つい胸に手を当てて身の内を探りがちだが、テレビはひとりで見るばかりではない。家族と一緒に見たいものもある。

「私はサイエンスものが多くて、『ETV特集』は全部録画。…家族なんかとは大笑いしたい。自分で見る時はじっくり考えて見たい。家族との時は笑う方が会話も進む」(男63歳A)

「時間ってというのはゆっくりになった。自分の時間もゆっくりになったし、テレビを見ている時間もゆっくり見られるし、ゆっくり癒されたいし。…(夫婦で)旅行なんかは行きたい、ゆっくりしたいというのはある。だからそういう時にテレビを見て、じゃあどうするかと、夫婦旅行のきっかけになることもある」(男63歳B)

## 6 社会的関心／ 情報番組とニュース

「よく見る」というのを時間の長さという観点で考えるなら、また少し違った視聴の様子が見える。

「(リタイアして) 増えたのは情報系。昼間やってる、キャスターがいて解説するような情報番組。午前中も午後もそうだが、そういう番組がかかっていれば、見ていなくても、解説だけ聞いていれば分かる。ちょっと興味があれば画面を見る」(男63歳)

「世の中の出来事や動きを伝えてくれるもの」を見たいという社会的関心はこれまでの高齢者の視聴ニーズのトップであり(表1)、団塊層でも高い。

「退職後、昔の(働いていた時のような)そういう思いがあるのか、やっぱり気になる。今どうやって(社会が)動いているだろうかと。そういう意味ではニュースを見る機会はきわめて増えている」(男64歳)

どのようなニュースを見たいのかを聞いてみると、これまでの高齢層でもよく聞かれた次のようなオーソドックスな意見は団塊層でも一定のシェアを占めているようだ。

「ニュースは事実を伝えてくれればいい。判断するのは自分」(男62歳)

「(好きなのは)『おはよう日本』『ニュース7』(ともにNHK)。事実を事実として報道しているのでいい。嫌いなものは自分の意見の押し付け、司会による」(男63歳)

だが、それだけでは物足りないという声の方がグループインタビューではより大きく、より若い感覚に近づいている。

「僕らみたいにリタイアした人は、多分に新聞見

ただけで情勢は分かる。その後どういふふうにか考えるか、NHKはそこが特に足りない」(男62歳A)

「退職してから『ひるおび』(TBS)とか『エブリー』(日本テレビ)などの情報番組を見る機会が増えた。…最近の新しいニュースを面白く解説してくれるので、ためになる」(男62歳B)

「(情報バラエティは) 尖閣問題からAKBまでやるので便利。NHKだとニュースしかやらないから、偏っちゃう」(男62歳C)

また、ネットのニュースとの違いを聞いてみると、テレビの方が優位にくる。

「窓口的にはPCの方が早くて、テレビで見る」(男62歳)

「ネットは知りたいことを知る。楽しくも何ともない。知りたいものだけを知るだけの道具でしかない」(男65歳A)

「(テレビの) 動画ニュースは存在感がある」(男65歳B)

「テレビの内容は出てくる情報に身を任せる。お任せに出てくる情報に身を任せる気楽さがいいところ」(男65歳C)

## 7 家族とうまくやりたい

### ○ リタイアの戸惑い

リタイアによる生活の大きな変化にうまく対応できる人もいるが、戸惑いを感じている人も多い。発言を整理すると主なものは次の3つである。

第一は、一度は社会から身を引いたものの何らかの形でまだまだ活動し活躍したいと願っているのだが思い通りにいかない、というものの。何らかの努力を続けている人もいるし、半ば諦めかけている人もいる。「仕事は探しているが、ないので今はうちにいる」。その目は主

に社会に向かっていく。

第二は、自由を持って余している、というもの。「リタイアをすごく楽しみにしていたのだが半年間やったら飽きちゃった」「趣味以外にやれることが欲しい」。この思いは第一のものとなりがりがあるが、どちらかといえば目は自分に向かっている。

そして第三は、目が家族や家庭に向かうものである。「女房がいることに慣れない」。この問題は、それぞれの夫婦関係、家族構成、家庭環境なども千差万別で、ケースによる違いが大きい。ただ、生活時間の大半を家庭で家族とともに過ごすことになるのはほぼ共通しており、そこでうまくやっていくことは重要な課題である。何より、テレビ視聴という観点でこの問題は大きな影響がある。

以下、第三の問題とテレビとの関係を見てみたい。

## ○ 団塊ジュニア

これまでの高齢者の場合、「家族」というとたいていは夫婦ふたりの関係だった。調査発言の中で夫婦以外に顔を出す家族というと、次はいきなり「孫」に飛ぶことが多かった。

ところが今回のグループインタビューでは、孫の話題が意外なほど少なかった。そこで改めて調査の参加者を集計してみると、話を聞いた48世帯のうち28世帯、およそ6割の家庭が未婚の子供と同居していた<sup>6)</sup>。

その結果、テレビ視聴にも子供の影響が強くなる。それは彼らより若いファミリー世代の傾向に似てくる。

「朝昼晩のニュースは見るけど、あとはだいたい子供(男26歳、女23歳、ともに独身)と女房に取られちゃう。だから結局、女房とか子供が見てい

るのを見るか、見たくなければ自分で本を読んでいるか、そんな感じ」(男62歳)

「(『ぴったんこカン★カン』や『いきなり!黄金伝説。』)は家族一緒に笑えるっていうのがいいんじゃないか。娘(27歳独身)に見せられてるって感じだが。子供が帰ってくるとこの番組に替えちゃう、そうすると私も見ちゃう」(男63歳)

視聴率調査で団塊層が若向きの番組をよく見ている、というデータが報告されることがあるが、同居している未婚の子供との同伴視聴が背景にある可能性も大きい。

さらに、リタイアして子供たちと一緒に番組を見るが増え、やがて本人も気に入ってくる、ということはあるに違いない。

「私の場合は(夜)10時までは娘(35歳独身)と女房のチャンネル権に付き合うが、女は刑事ものが好き。だから9係、科捜研、安積班とか全部見てる」(男65歳)

「(『ネプ&イモトの世界番付』)はけっこう家族が見てる。家族が見るヤツで自分が興味あるものは、ちらっと、多分見ている。要するに家族が見てる中で、自分があれっと思うものがあれば見る」(男62歳)

## ○ 家族とうまくやりたい

リタイアした夫が家庭に入ってくるのは、迎え入れる妻の側にも戸惑いがある。

「仕事していた時は、顔を合わせるのは夜。それが朝から私はずっといと向こうもいやがる」(男60歳)

リタイア後の夫婦、あるいは家族がうまくやっていくのにテレビが利用されている家庭は多い。まずは食事時から始まる。以前よりずっと長い時間、一緒にいるとテレビが夫婦の「かすがい」となる。ちょっとした会話のきっかけ

にもなる。こういった事情はこれまでの高齢者調査でもほぼ同じような傾向だった。

「興味がないと、家内と一緒に見ている私には覚えてない。家内と一緒に見ている理由は、話を合わせるため」(男63歳)

もっとも、むしろ会話しないですむためにテレビをつけている、という発言の方が多めだった。

「消すと女房の話を聞かなくちゃいけない。聞きたくもないから。9時過ぎると(女房は)眠くなる。それまではおしゃべりさせないようにテレビをつけてる」(男62歳)

「夫婦水入らずで温泉に行って、そこにテレビがなかったら悲惨」(男64歳)

もう少し夫婦仲が良好だと共有できる関心に合わせて番組を探す。その意味で最も利用されるのは紀行番組である。

「女房とフランス、カナダ、アメリカに行ったから、番組で見て、あそこに行ったとか話題になる。女房と、ここは行ったねとか、ここは懐かしいねとか話しながら」(男64歳)

夫から見れば、自分が入る前から既に出来上がっている家庭の視聴慣行の中に入っていくわけだから、自分の方が遠慮しているのだ、という意識を持つ人が多い。

「女房と一緒に見るテレビと、女房だけが見るものがある。女房が見るものは、私は興味がないけど、ながら見することがある」(男62歳)

中には非常にうまくいっている夫婦もある。

「結婚して42年、夫婦の見る番組が似てくる。家内も(自分が見る前に)その番組をつけて見ている。食事の時間はふたりで共通の時間」(男65歳)

ただ、上の発言には他のグループインタビュー参加者からすかさず反論が出た。

「趣味が似てくるのは異論あり。妥協の産物

だ。どちらかが我慢しているんじゃないか」(男62歳)

他の参加者は一斉に後者の意見に賛同した。実際に共通の趣味を持つ夫婦はもちろんたくさんいるだろうけれども、ただ、リタイアして長時間一緒にテレビを見るようになることで、それまで意識されていなかった趣味の違いが顕在化することもあるかもしれない。

「60歳過ぎると趣味の違いが鮮明になる」(男63歳)

結局、ほとんどの人は、夫婦で見ると自分ひとりで見るとを使い分けて見ることになる。それはたいてい家族同士で分かっている。

「定年祝いに即テレビを買ってもらった。女房とか息子・娘がみんなお金を出してくれた。楽しんでくれということ」(男64歳)

高齢者の夫婦がそれぞれ別々のテレビを見るようになる傾向については、これまでの高齢者調査でも報告したが、現在、団塊層ではその過程が進行しつつある様子が見える。

## 8 テレビに求めるもの

以上に述べてきたように、中には互いに相矛盾する側面も含んだ様々な思いや状況が交錯する—それは個々人により異なるというのに加えて、各個人の中においても—そのようなリタイア期という時期に、団塊層がテレビ番組に求める要望や要求はすっきりとまとめられるものではない。また、以下に見るテレビへの諸要望は文字面だけではよく聞く文言で語られるが、団塊層が抱える状況を重ねて考えてみるのが大事だろう。

テレビに何を求めるのかを、前述の調査②から抽出した表3の番組の一部を見せながら

ループインタビューで聞いた。それらを、前節で挙げた団塊層の主要な関心領域「社会」「自分」「家族」の3つに対応させる形で簡単にまとめたい。

表3 調査③で対象者に見せた番組  
(最近テレビ視聴が増えた団塊男性の調査対象者によく見られた番組)

	調査②での接触者率(%)
びったんこカン★カン (TBS)	16.3
所さんの世界のビックリ村! (テレビ東京)	13.8
秘密のケンミンSHOW (日本テレビ)	13.6
世界びっくり旅行社 (NHK)	12.4
いきなり! 黄金伝説。 (テレビ朝日)	10.7
ネプ&イモトの世界番付 (日本テレビ)	10.0
キッチンが走る! (NHK)	9.4
奇跡体験! アンビリバボー (フジテレビ)	5.9

\*調査②で接触率上位の番組のうち、「以前より見るようになった」など、視聴傾向に変化がある番組を中心に選択した。なお接触率が高くても、ニュース、ドラマ等は除外した。調査期間の放送はスペシャル編成などのものも多く、調査③で視聴した録画は当該の定時番組などを使った。

## ○「社会」

社会に対する関心については、社会から取り残される不安と、まだまだ働きたい、社会とのつながりを維持したいという意欲とを持っている。こうした関心から、社会から遅れないように「ニュースをリアルタイムで見たい」という欲求があり、社会をもっとよく知りたいという気持ちから「事実だけでなく解説を知りたい」という要望がある。

社会参加への意欲は、リタイア直後であるだけに、単に願望であるというだけでなく、もっと上の年層に比べてより切実であったり複雑であったりしている。以上についての詳細は前述のとおりである。

## ○「自分」

自分についての関心は、これまでの高齢層で見られたものと基本的に変わらない。

現役時代にはやりたくても十分にできなかったことがある、という思いは強い。今こそその自由を得たのだから存分にやりたい。そのため役に立つ知識や情報を求める欲求がある。ところが、リタイア生活を半年、1年と送ってみるとやや気持ちが萎えてくる。また、老いによる健康や頭脳の衰えへの不安も感じている。このような、前向きの気持ちと後ろ向きの気持ちが交錯する構図は高齢層と変わらないが、その揺れ幅が現在の団塊層ではより大きくなっているようだ。

テレビを見て「知識、教養を得て自分を高めたい」という欲求がある。ドキュメンタリーやサイエンスものに気持ちが向く。高齢層と同様にクイズ番組も好きだが、「最近は簡単な問題が多すぎる」と要求水準が高い。

一方、萎え衰えがちな自分を奮い立たせてくれるような番組も求めている。「まだ頑張れる自分を感じたい」という欲求がある。青春時代の音楽を聞いてその頃の気分を思い出したいと思ったり、本気で頑張っている人間の姿を見たいと思っている。前述のように、『仕事ハッケン伝』に勇気づけられるという発言は印象深い。

ただしこれについては、マーケティング的には注意が必要である。以上のような欲求は間違いなくあるのだが、そのための番組をいつも見たいわけではない。欲求を満たしてくれるのに十分なクオリティーのあるものを必要なだけ見たいと思っている。しかも、見たいもののジャンルや内容も人による違いが大きい。視聴率には、ただちに結びつくものではない。

## ○「家族」

高齢期に入っている程度時間が経つと、家族との関係や過ごし方も落ち着いてくるが、リ

タイア期にある団塊層は家族との関わり方に  
関心の高い人が少なくない。同居する未婚の  
子供との関係も含めて、テレビに家族との仲  
立ちを求める気持ちがある。

その結果、テレビへの欲求は「家族と一緒  
に笑いたい」「会話や共通意識を持てるものが見  
たい」などとなる。

### ○ 団塊層とテレビの関係から

最後に、団塊層は子供の頃からテレビに深  
く馴染んできたことにより、これまでの高齢層  
に比べて、テレビ視聴に対する積極性や能動  
性が強い。見たいと思いつながら見られなかつた  
ドラマシリーズを再放送などで一気に見たり、  
若い頃熱中した番組の録画を入手して再視聴  
するなどの行動は、これまでの調査では出会  
わなかつた。

団塊男性は、自分自身がテレビを楽しみた  
いという積極さを感じられる。「もっとワクワク  
したい」「感動したい」「思い切り堪能したい」「豊  
かな気持ちになりたい」、そういうものをテレビ  
に求める声が数多く聞かれた。

## 9 まとめ

高齢層の調査を行った時は、高齢層の意外  
な「若さ」に驚いた。今回、団塊層が高齢期  
に差し掛かった時点で行った調査では、テレビ  
との出会い方をはじめとするテレビとの付き合  
い方などに、以後に続く「テレビ世代」の先駆  
けとしての「若さ」がたしかにあった。以上の  
報告でも団塊層の若さを強調した部分がある。

だが今回の調査では、かつての高齢者に感  
じたような印象強い若さを感じられなかつた。  
その背景にはいろいろな要因が考えられるだろ

うが、一つには彼らが時代の端境期に当たっ  
ていたという側面があるのではないか。例えば  
団塊層の大半が小学生のうちにテレビと出会っ  
たとはいえ、それが高学年なのと低学年なの  
では大きく違う。また、自分より上に兄や姉が  
いる人と、下にいる人による違いもある。上  
は戦中派、下は明らかに戦後派だ。そして今  
回は触れなかつたが、女性については夫の年  
齢により家庭の雰囲気は随分違うだろう。

そうしたことから、テレビ視聴という観点か  
らすれば、団塊層の人々は決して同質ではな  
い。単純に若くも古くもない、それを最後に確  
認しておきたい。

(さいとう けんさく)

### 注：

- 1) 本稿は、年代的にちょうど今リタイア期を迎えて  
いる人々がどのようにテレビと接しているのかを報  
告するもので、いわゆる世代論を論ずるものでは  
ない。従って、文中では「団塊の世代」という用  
語は使わず「団塊層」という表現で統一する。
- 2) 「高齢者のテレビ視聴(上・下)」『放送研究と調査』  
2008年9,10月号ほか
- 3) 調査設問ではリタイアを「いわゆるリタイア(定年・  
引退、現役を退くこと、子育てや介護などがひと  
段落した状態など)」として聞いた。グラフは60  
歳から70歳の男性について集計して作成した。  
また、視聴増大者率は「あなたは、昔に比べて  
テレビを見ることが増えたと感じますか」の問い  
に「はい」と答えた人の比率。
- 4) 「放送研究レポート・テレビがやって来た日」『放  
送研究と調査』2008年12月号
- 5) 「高齢者のテレビ視聴(上)」『放送研究と調査』  
2008年9月号, p.16
- 6) 2010年の総務省労働力調査の集計によると、壮  
年(35～44歳)で親と同居する未婚者は295  
万人に及んでいる。この人数は、団塊層の子供  
たちが当年層に参入することで急増し2003年の  
1.5倍超にもなっている。[http://www.stat.go.jp/  
training/2kenkyu/pdf/zuhyou/parasit9.pdf](http://www.stat.go.jp/training/2kenkyu/pdf/zuhyou/parasit9.pdf)